
万華鏡きらきら。

雄歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

万華鏡きらきら。

【Nコード】

N8991D

【作者名】

雄歩

【あらすじ】

大好きだった幼なじみを亡くした翔平。絶望の中現れたリヨウとななる謎の少女。リヨウの登場で翔平の人生は大きく動く……。

第一話 涼音

ざわつく病室

声をあげ何かを指示するいつもいる白衣の男

いたい・・・・・・・・何が起きてるんだ・・・・・・・・

一人の女が近づいてきて

「ご家族ですか？」

聞かれた

なんだかよくわからないけどいつい僕は答えてしまった

「あっはっはい」

本当は家族ではない

家族のようだけど家族ではなかった

「ちょっと病室前で待っていて下さい」

僕は重い足を少しずつ動かし

病室を出た

邪魔ものが消え去った病室はまだざわめいていた

何が起きてるのかはわからない

でも自然に涙が出てきた

頭の中が真っ白なのに

声をあげて泣き喚いた

思い体を少しでも軽くして冷静になるように

僕は体に言い聞かせた

でも……………

そんなことはできなかった

僕には……………

そんなこと無理だ……………

悲鳴に近い鳴き声がだんだん言葉を変えていく

「涼音え 涼音え……………」

無意識に出たその声が自分に何が起きたかを言い聞かせるかのようだった……………

病室のドアが開く……………

さっきの白衣の男が出てきた

僕はとつさに白衣の男に飛びついた

「お願いします。涼音を涼音を助けてください。たのむよ・お願いだつてばあ……………」

頼んでも頼んでも白衣の男は顔色を変えなかった

「落ち着いてください。」

白衣の男はそういつて僕の肩をもった

「落ち着いて聞いてください」

白衣の男の震える声

「涼音さんは今夜が山場です・・・」

僕の足は力が入らなくなりがくんと体が大きく動く

膝が落ち方が大きく揺れる

「最後の時は最愛の人と一緒にいたいと思います。だから・・・翔平さん・・・そばにいてあげてください・・・」

僕は再び病室に入った

涼音がいた

意識があつた

「・・・しょう・・・ちゃん・・・」

か細い声で僕を呼んだ

「涼音っ」

僕はついつい大きな声を出してしまった。

しっかりとした足取りで涼音に近寄る

「さいごまで・・・そばに・・・いてえ・・・」

声がほほ息を吸ったり吐いたりする音に近くなる

「わかった。わかったから。この手一生離さないから」

「・・・よかった・・・たあ・・・生きてて・・・よかったあ・・・」

「

「涼音？」

「だって・・・しょう・・・ちゃんに・・・あえた・・・もん・・・」

涼音の目がずっと細くなる

「僕もっ僕も生きててよかったよ。だって涼音に会えたんだから」

「ふふっ・・・・・・しょ・・・うちや・・・ん・・・きざ・・・だねえ・・・」

涼音が笑った

久しぶりに見た笑顔は・・・

最後の笑顔だった・
・
・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8991d/>

万華鏡きらきら。

2010年10月15日07時16分発行